

## 平成22年度県新規採用職員研修・知事講話

H22. 4. 5 職員人材開発センター

### 我が為すことは ～県民と地域に捧げて～

(知事) 皆さん、おはようございます。皆さんは、いよいよ鳥取県庁の職員として、警察とか他の機関もごぞいますけれども、新しい仕事へと踏み出されることになりました。先般、職員関係では辞令を私の方から差し上げたわけでありまして、その時にも申し上げましたが、是非とも皆様、すばらしい人生になりますように、この門出をお祝い申し上げたいと思う次第であります。

「桜、桜、人が、人が、子を歩かせて」。鳥取県出身の尾崎放哉という俳句、自由律の俳人がありました。その尾崎放哉の先生だった人、師匠であった井泉水という人がいますけれども、その井泉水の歌に詠まれているわけでありまして。ちょうどこの週末、桜が満開でありました。東部も中部も西部もそうであります。皆さんのお住まいの近くでもそれぞれに美しい桜の花が咲いたのを目にされたことではないかと思えます。桜、桜、人が、人が、子を歩かせて。桜の花が本当にいっぱい咲き乱れるほどに、その下を人々が歩いている。それは人が歩いているだけではなくて、家族の愛が見えるわけですね。子を歩かせて、子ども達とともに連れて家族連れがにぎやかに楽しそうに歩いている、そんな情景が目につくわけでありまして。こういうすばらしい門出の季節、春を今、迎えているわけでありまして、皆さんもそれぞれに胸の中に去来するものがあると思えます。これまでお世話になった先生方や、ご両親、ご家族の皆さん、友人達、いろいろな人達に支えられながら今日のこの日までこられたと思えます。ただ、また片方で不安もあるでしょう。これから新しい人生に入って行くわけでありまして、しかしそういう中で自分を本当に活かすことができるだろうか、自分はいったい何をしたらいいのだろうか、自分がやりたいことはこういうことがある、だから県庁に入ろう、あるいはそれぞれの機関に入ろう、というふうに決められたのだと思うのです。まず私はこう思うのですが、是非皆さん、初心を大切にしてもらいたいと思えます。

「青雲の志」という言葉があります。今、テレビで「龍馬伝」というドラマがありまして、だんだんとクライマックスに入ってくると思うのですが、今、土佐藩の中の内紛ですね、吉田東洋が暗殺されて龍馬が追われるという、そういうストーリー展開もありますけれども、ああいう時代、明治維新の頃、志士が跳梁跋扈していたわけでありまして。それぞれにこの国を変えてやろうという思いを持って、それぞれの役割を果たそうとしていたわけですね。小さな人間達だったと思うのですが、その小さな人間である若い人達、ちょうど皆さんぐらいの年齢の人達が主人公なのです。そういう皆さん達が明治の世の中を作っていく、世の中をひっくり返して変えていく、そういう力を発揮したのですね。そういう日本の歴史を紐解いてみても、やはり青雲の志というのは大切なのだと思えます。初心忘れるべからずと、観阿弥世阿弥の能の世界にも言われるわけでありまして、今の気持ち、なぜこの県庁に入ったのか、そういう思いを大切にしていきたいと思えます。

今日は、教育委員会とか、あるいは警察本部だとか共済だとか、いろいろ入っておられますけれども、それぞれの皆さんの今入った動機といいますか、気持ちをちょっとここで共有してみたいと思うのです。聞いているばかりでは退屈だと思えますので、少し喋ってもらいたいと思えますが、皆さんに当てさせて頂きますので、自分はなぜこの仕事を選んだのか、何をやってみたいのか。自分のどういうところをこれからの人生の中で伸ばしてみたいのか、いろいろな思いが今、あると思えます。それを語ってやって頂ければありがたいと思えます。ちょっと自分で喋りたいという人はいますか。ここで手が挙がるとそこでボーナスが弾まれる

ということがあったのですが、残念でした。それは次回にお預けということにしまして、最初なので喋りにくいと思いますから、私の方が指名させて頂きましようか。それでは皆成学園の房安さん。はい、どうぞ。

(房安) 皆成学園の保育士の房安理紗です。私が保育士を目指したのは、小学校の頃から保育士に憧れて、それで様々な保育園でインターンシップとか実習をさせてもらって、鳥取県内の、それでいろいろな保育士の方々に会って、尊敬するような保育士の方に出会って、保育士に私もなろうと思いました。高校のときに、担任の先生や友達に、ある問題がちょっとあって、その方々にいろいろ助けてもらって、その方々や鳥取県の方々に恩返しができたらなと思って、県職員の保育士になりたいなと思いました。

(知事) その、厳しい何か状況があったのですか。なるほどね、それで社会にもう1回、自分から恩返しをしてみたいと。ありがとうございます。それから次は、衛生環境研究所の中本さん、お願いできますか。

(中本) 衛生環境研究所の中本究之介と申します。自分は、大学のときに環境問題がいろいろさげられる時代だったので、環境に貢献できるようなことを学びたいと思ひまして、そういうことが学べる場所を探して大学で勉強してきたのですが、今までずっと親の仕事の関係で県外にいたのですけれども、就職するにあたって地元の鳥取に戻ってきました、すごく自然が豊かな鳥取県という魅力に改めて気づかされまして、今まで自分が学んできたことが活かせるような仕事がしたいなと思ひまして、この鳥取県の環境を皆に知ってもらいたい、良い環境を守りたいという、そういう気持ちでこの仕事を選びました。

(知事) 分かりました。それでは、次は西部総合事務所の県民局、早川さん。

(早川) 私は聴覚障害という障害を持っています。聴覚障害ではありませんが、小・中・高・大学と健常者の方達と同じように進学することができました。それはやはり、地域の方や学校の先生、両親といった周りの方の支えがあったからこそです。その方たちへの恩返しといった意味でも、今度は私自身が役に立とう、県民の皆様のために、地域のために役に立とうという思いで県庁に入りました。それが私の県庁に入った動機です。

(知事) ありがとうございます。それからあともうひと方。では他のところで、警察の鳥取警察署の片山さん。

(片山) 私が鳥取警察署の警察事務を志望したのは、飲酒運転の防止に取り組みたいと思ったからです。私は大学生のときに飲食店でアルバイトをしまして、そのときにお酒なんかも出したりしたわけなのですが、やはりそういったお客様が飲酒運転をされないように代行を頼んだりとか、そういったことをして飲酒運転を無くしていく取組みをそのときからやって、将来もそういったことを無くして悲惨な事故が起こらないようにやっていきたいと思って警察事務を志望しました。飲酒運転を無くす取組みとしては、広報等でポスターで防止を呼びかけたり、あるいは飲酒運転の事故がどれくらい起こっているのかということを経験として県民の皆様伝えていきたいと思って、この仕事を志望しました。以上です。

(知事) はい、ありがとうございます。今、4人の方から、皆さんのほんの一握りの一つの断面だと思ひますが、それぞれの思いの一端を聞かせて頂くことができました。房安さんの方からは、保育士というすごい先輩がいたのでしょうか、そういうことに憧れたりしながらも、自分自身も厳しい経験をしたことがあって、もっと社会の方に恩返しをしたい、保育士というそういう職業に対する鮮明な思いもあって、選んできたというお話がありました。中本さんは、大学の時の専攻もあるのでしょうか、環境ということに是非関わってみたい、帰ってきてみて鳥取県の自然環境の素晴らしさをもう1度再認識しましたと、やってやろうという、そういう決意を聞けたなと思ひました。早川さんは、障がい乗り越えて、今日、ここに皆さんの仲間として座っておられるわけでありまして。ご両親だとか、あるいは学校の先生とか、行政の関係者の方達とか、いろいろな方々に支えられて、会社の皆さんにも送り出されて、ここにやって

来たということであります。普通の人と同じように生活をしていく、そういう共同参画の社会でありますけれども、そのモデルになってほしいなという思いを、私も聞きながら感じました。片山さんは、警察の方に志してきたのは、大学のときの経験から、アルバイトで自分も働いたことがあるけれども、やはり飲酒運転などを無くしていきたい、そうした意味で下支えをしてルールが守られる世の中に変えていこうという、そういう思いがにじみ出ていたと思います。素晴らしいと思いますね。皆さんも同じように、それぞれに今、思いを持っているはずですよ。その初心を大切にしてほしいと思うのです。世の中のために尽くしてみたいだとか、ふるさと鳥取に帰ってきて、ここ鳥取を自分の力で変えていきたいだとか、あるいは人々の愛情といいますか、支え合い、そういうものを体験できる、実際につくりだすことができるような、公に奉仕する公務員の社会がありますので、そういう公務員としての役割を果たしたい。そういう思いがそれぞれにあるのだと思うのです。

私自身どうしてこういう仕事に就いたのかと言いますと、まず最初はやはり公務員の世界に入ったのです。公務員の世界に入りましたのは、ボランティアを大学のときにやっていた、障がい者の方のお世話といいますか、共同参画をやっていたということで、世界大会のアビリンピックというものがあったのです。耳が聞こえない、あるいは肢体不自由と言われます手足に障がいがある、そういう、いろいろな方々が世界中から集まりまして技術を競い合う。私はそのタイランド、タイのチームに付き添ったわけでありまして、銀メダルをとった子がいたのです。皆で応援していて非常に嬉しかったのですけれど、ボランティアとしても。これから国に帰ってどうしたいですかと聞いたら、そうしたら、これで国に帰ってしっかりと仕事につきたいと、こう言っていました。非常に厳しい現実がある中で、そういう思いを知らされたときに、本当に感動したことを今でも忘れることはありません。実際に障がい者の皆さんと当時、お付き合いをしていましたが、もう人間性があふれていますよね。早川さんもそうでありまして、人並みというか同じように、男性であったらいいおじさんが女子大生の手を握って喜んだりしているわけでありまして、そういうのが普通にある。障がい者の皆さんにとってこうしてほしいなという思いがいろいろある。例えば、車椅子を押す時も、いきなり押されるとびっくりしますので、声を掛けてあげるとか、階段を上がる時に2人がかりで持ち上げてあげるとは、その時に階段の下を見せて持ち上げますと、皆びっくりします。おっことされるのではないかと思ひまして。だからマナーとして、階段に向き合うような形で持ち上げてあげる。ちょっとしたことなのですけれども、そういうことがあります。こうしたいろいろなことを教えられたり体験をしたりしました。できればお金儲けということよりも、そういうように何か自分なりに人の役に立つようなことをやってみたいなといって、社会人の1歩を踏み出したのです。

3年ほど前でありまして、この鳥取県の知事選挙に出るといふふうには決心をしたのも、それはこちらで働いていた時に、一緒にやってみないかと声を掛けてくれた熱心な人達がたくさんいたのです。自分はそういう世界とは無縁だと思っただけなんですけれども、こうやって必要としてくださる方々がおられたことに本当に胸が熱くなる思いがしまして、じゃあ自分が全てを捨てるわけでありまして、全てを捨てて鳥取県に戻ろうかなというふうには思っただけなんです。家族も反対するのかなと思ひましたけれど、意外なことだったのですが、私の家内、妻はやれと言ったのです。これ驚きました。同じような話がそれまでないわけではなかったのですが、そのときはいつも反対していましたので、私が相談すれば反対されるだろうし、それで別に諦めるつもりとか、それはいろいろな人生がありますので、自分なりに今まで通りやっていたらいいなと思ひましたのですけれども、妻が賛成したのです。なぜかという、妻の義理の弟が亡くなったのです。まだ40歳位でしょうか、大学の先生をしていまして、最後まで。それで他界をしたところでありまして、短い人生ではありましたが、ただ、その死に際のことを見ていると、また妹に寄り添っていて、早死にはした

けれども良い充実した人生だったと。やはりやれることをやらせてあげるのが家族ではないかと、こういうようなアドバイスももらっていたようなのです。だから私もびっくりしましたが、やってみたらいいじゃない、応援するからと言われまして、それでじゃあしょうがないなど。地元の方がどうなのかなというのを見ながら、最終的には帰ってこいということに地元の方もまとまってきたものですから、鳥取に帰ってきたというのが本当のところなのです。選挙運動が始まりまして、非常に生活が厳しくなると、途端に家内は反対をし始めたわけですが、今さら遅いと。今は機嫌よくやっておりますけれど、とにかくいろいろなことがあります、人生ですからね。是非、悔いがないように、今の思いを大切に、自分をぶつけてみてほしいと思います。

今日は、そうした皆さんのフレッシュな思いをまず聞きましたけれども、若干、私の方から皆さんにはなむけと言いますか、最初に聞いて頂きたいことをいくつか取り上げてお話をさせてもらおうと思います。皆さんの方にレジュメを配っております。簡単なことですのでそんなにたくさんメモを取る必要はございません。気楽に聞いてもらったらいいです。そう思います。

その中でいくつかお話をしたいことがあります、まずは、時代が大きく今変わろうとしているということです。皆さんもたぶん感じていると思います。日々のニュースを見たり、あるいは自分の身の回りを見てもそうです。就活という言葉がありますね。今日も新聞にそういう大きな文字が踊ったりしています。まだまだ就職できない仲間がいる、こんな厳しさを皆さんの世代は今、味わっているわけです。大変なことだと思います。こういうように経済の状況が本当にひっ迫してきた。この原因は、高度成長と言われる時代を日本人は経験してきたのです。とにかくほっといても給料は上がるし就職先はあるしという時代でありました。けど今では世界中が1つのコミュニティになってしまったのです。中国だとか韓国だとか、あるいはアメリカだとかヨーロッパだとか、インドだとか、そうした様々な国々が同じように対等なものをつくったり、売ったり、そうやって経済を起す時代になってきています。人件費にも格差がついていまして、国によっては非常に安い人件費で製品が作れちゃうものですから、製品の競争力は厳しいことになる。そういうようなわけで、経済はどんどんひと昔前とは変わってきているのです。だから次のシステムを作らなくてはいけない、というのが今の状況なのです。時代の断面を私達は生きているということだと思ふのです。いくつかそれを解いていく構図が見えるのではないかと私は思っているのです。その1つは大交流時代が到来するということがあります。その大交流時代、何を言っているかといいますと、それは世界が1つのパッケージになってきたということですね。日本の鳥取にいる私達は、アメリカの西海岸にいるあのひとあまり関係はないと思っているかもしれませんが、だんだん関係が出てきているのです。一番分かりやすい例で言えばインターネットです。皆さんの携帯電話1つからもいろんなコミュニケーションができちゃうわけでありまして、昔であれば飛行機で行ったり船で行ったりして、大変な思いをしてコミュニケーションをとったわけでありまして、物が動くのもそうでありました。今は Amazon.com でアクセスをすれば、向こうから買物だってできるわけです。世界中のものが手に入る。個人輸入みたいなものが入りまして、そういうふうには世界はグローバルな社会として、たった1つの社会に収斂し始めているわけでありまして、これはこの鳥取県でもその意識をしなければいけない。大交流時代が始まっているということですね。

これは国内的にもそうなのです。今まで鳥取市になかったものがあります。それは高速道路なのです。高速道路というと、皆さんはすぐに新聞だとか何かに出てくるように大規模公共事業とか、無駄な投資だとか、そういう頭があるかもしれませんが、今日は土木関係の技術者の方もここにいられていますが、そういうことではなくて、まず第1本目の道がない。今まで、全国47都道府県ありますけれども、まともな高速道路が入って来ていなかった唯一の県庁所在地が鳥取市だったのです。3月28日にこの状況が変わりました。佐用ジャンクションから北へまっすぐ鳥取自動車道という道路ができました。大原から西粟倉の8キロぐらい

がまだ開通していないのですけれども、それ以外は鳥取まで開通をしています。これだけではないのです。更に東西を貫くように日本海側の道路も着々とできてきます。来年度には東伯、そして中山と言われますけれども、県の中部のところ、旧東伯町、赤碕町、琴浦町のところに東西に高速道路が通ることになっています。これは間違いなく通ります。更に遠くない将来でありますけれども、鳥取からまずは今の布勢のあたりまで、これは近々開通が見込まれる地域ですね。更に吉岡温泉のところまで。西の方で言えば中山から名和のところですね、この辺りも開通をしていくことになると思います。こうやって順次開通してきますと、鳥取と米子が一直線に高速道路で結ばれることになるのですね。元々せいぜい100キロの距離だったのです。他の地域で言えば、100キロの距離なんてたいしたことはないのですよね。東京とか大阪で暮らされた方はたくさんおられると思います、この中にも。そうした大都会で言えば通勤電車とかちょっとした高速道路で、100キロ位のところなんてすぐに行けちゃうわけでありまして、しかし鳥取県の場合、そこはなかなかうまくいかなかった。これがいよいよようやく本格的に繋がるようになります。ひと昔前までは、列車でも鳥取から米子まで2時間とかかかっていた。今は特急列車で1時間でいけるわけでありまして。こういうようにどんどん距離間が近くなってきているわけです。現に今回高速道路が開通しましたから、鳥取方面へ観光で来ようというお客さんが増えてこなければいけないのです。しかし増えるかどうかは分からないのです。ここが大切なところですよ。今、大交流時代が始まりまして、人の流れは変わり始めます。鳥取県の魅力が増えるいいチャンスなのですけれども、しかし本当にこれを活力に結びつけることができるかどうか、というのは皆さん方にかかっています。私達が今、この時代を生きていて、この時代に県政を担当していて、住民の皆さんと一緒に良いうちに時代を変えていくことができるかどうか、これは我々がその鍵を握っているわけですよ。

同じようにいくつか時代を分ける鍵が見つかってきていると思うのです。1つはさっき中本さんがおっしゃった環境ということです。鳥取は環境がいいですね、自然がすばらしいですね、と皆おっしゃいます。大体鳥取というと何を思い浮かべるかですね、県外の人たち。鳥取って何がありますかという、なんて言うでしょうね。砂丘ですよ。砂丘とだいたい言われます。鳥取砂丘。この鳥取砂丘はもともとは有島武郎が有名にした言葉だったのです。「浜坂の遠き砂丘の中にして、さびしきわれを見出でつるかな」と詠んだのです。この歌の意味分かりますかね。これはなかなかのドラマなのです。当時、有島武郎はいわば不倫関係をしたのです。女性と付き合っていて、日々悩んでいたのです。家族的にも。唯一この歌を鳥取砂丘の中で詠んだわずか1ヶ月後に自ら命を絶っております。今でいえば朝のワイドショーとかでも毎日大報道ですよ。「有島武郎、愛人とスキャンダル」とかこうやって出たわけでありまして、当時もそれでこの詩がありましたので、これがその有島武郎の情景と重なり合うものですから、いっぺんに砂丘という言葉が有名になっちゃったわけです。砂丘と言えば鳥取、鳥取砂丘だ。こういうようになりまして、実際、雄大なところでありまして、鳥取砂丘というものが今、全国でも名前が売れているということでもあります。

最近出張したりしまして、よそのところに行きまして、私は鳥取から来たのですとすると、「あっ連続不審死事件のところですね」と言われたりして、だいぶ時代は変わってきているのですけれども。あれも砂丘近くのお豆腐屋さんとか、いろいろありますが、どうでもいいことですよ。その鳥取砂丘、これはほおっておけば維持されるのでしょうか。そうなのです。違うのです。これは人が手をかけないと維持されないのです。なぜかと言いますと、この間も京大の総長をした先生が来られまして、砂丘を売り出すには世界の人に訴えるのなら砂丘というのはどこでもある。それはそうですね、ゴビ砂漠とか、サハラ砂漠とか、もっとももっともかい砂丘はあるわけですから。ここが他と違うのは一つありますよ、その日はぎんざん降りの雨だったのです。こんなに雨が降ることですと言っていました。あれだけ湿気があり湿潤なところで、こういう地形があるというのはすごいことだと。冬になるとスキー場に早変わり

をするわけでありますから。そういうところでありますので、当然緑が生えてくるのですね。これと戦わなければいけないのです。今から4年ほど前にニューヨークタイムズという、世界のリーディングニューズペーパーがありますけれども、その新聞紙上で一番前の方のページで大きく取り上げられていました。そのとき私はアメリカの方にいたのですけれども、びっくりしまして、新聞記事を見てどこかで見たような絵だと思ったら、やはり鳥取砂丘なのですよね。タイトルを見ますと「緑の浸食と戦う」と書いてありました。「緑の浸食と戦う人達」ということで特集記事が組まれていたのです。これは、ニューヨーク・タイムズの記者が、その前は中東の方におられたそうでありまして、それで転勤して東京支局の方にやって来て、鳥取砂丘というところに行ってみたら、緑を雑草を抜くので一生懸命になっている人達がいるのに大変興味を持って、そういう記事を書いたのだそうであります。世界中は今、砂漠化と戦っているのです。砂漠があると木を植えたりするのですね。これも鳥取が得意なところでありまして、乾燥地研究所というところでは木を植える、そういういわゆる農業をやる。実際にラッキョウ畑ありますよね。中国に行きますと長いもとか、ああいうものをやっています。砂丘に適するものってあるのですよね。西の方に行くと白ねぎを盛んに栽培します。あるいは最近もう1回復活させようと思って綿花を作っていますね。綿花、綿の花。その綿の花なんかも真綿という日本の綿なのです。洋綿と違まして、もうほとんど生産がないです。これを復活させよう。西部に花回廊というところがありますね。あのフラワーパークで綿の花を栽培しているのです。きれいな花が咲きます。咲くのですけれど、そこのガーデニングをやっている園芸担当の責任者の方がこうおっしゃるわけですよ。ここで確かに咲くのですけれども、やはりちょっと良くないですね。これは砂地でないと駄目ですって言うのです。だから弓浜半島が本当に適しているのです。史実を紐解いてみますと、大体明治維新の頃、明治9年ころの統計を見ますと、日本中で一番綿が生産されていたのが、鳥取県西部の会見郡です。富岡製糸工場っていうのを学校で習ったですね。当時、官営工場なんかを全国で殖産興業と言ってつくるわけでありまして、あれで代表されますように、当時の綿、綿糸、あるいは綿織物、そういうものは花形産業でしたね。その中心は実は鳥取県にあったのです。意外でしょう。100年前はそうだったのです。そういうようなことだったのですけれども、なぜかというところと生産に適するところだったから。こういうように砂地が全て可能なわけじゃなくて、ここのようにたくさん雨も降れば雪も降る、降水量があるところで砂地というのは、結構活かせる道があるのだということですね。だから砂丘は逆に大変なわけでありまして、観光地としてやっていこうって思っていると大変です。平成に入ったころは草原化しはじめました。40%ぐらいですかね、緑で覆われるようになってしまったのです。このままじゃ観光も何もやっていけないわってなりますから。在来種があるのですけれども、ハマボウフウとか、いろんな在来種があつて、これは固有種でありますから、これを抜くわけにはならんのですけども、それ以外のものを中心にしまして、外から入ってくる草がありますから、そういうものを抜こうということをやっているわけです。ボランティアを募集してやっていたものですから、それをニューヨークタイムズがを見つけまして、これはおもしろいということで記事にしたってことです。日本には日本の環境の取組みがあるのだという記事でありまして、鳥取の環境回復推進活動、民間の皆さん、住民の皆さん方が中心になってやり始めたことが、これだけ世界で驚嘆に値する環境推進活動になったということなのです。すばらしいことだと思います。

だから私は、あそこに落書きっていう悲しい事件があったもので、この機会を捉えて砂丘に憲法をつくらうと思ったのです。「日本一の鳥取砂丘を守り育てる条例」という条例をつくりました。議会でも賛否両論分かれまして、反対の方が多いかどうかというぐらいだったです。議会の途中で意外な助け舟が現れまして、これはヤフーなのです。ヤフーでアンケートがありますね、ヤフーアンケート。うちは頼んでないのですけれども、勝手にヤフーさんがおもしろがってアンケートをしてくれたのですね。全国の人に、鳥取県が罰金をつけて落書きを砂丘に

するのを禁止するっていう、そういう条例をつくっているけど、これについて賛成ですか反対ですかって、そういうことでアンケートをやってくれたのです。その結果としては過半数の人が賛成ってなっています。反対の人は意外と僅かだったですね。なぜ議論になったのかと言いますと、せっかくお客さんで来てくれた人に罰金を課するとは平井はけしからん、とこういうことであります。なるほど分からんでもないですけど、私は中本さんがさっきおっしゃったように直感しているのですが、これからの時代は環境だと思っております。環境が良いということ、環境に自分が貢献しようということが人間の価値観になってきている。ひと昔前で言えばポイ捨てだってあまり気にならなかった。そうやって大量消費社会とか言いまして、そういうのを謳歌していたわけですが、これが我々の現代社会の文明だと。しかし、時代は変わってきまして、きれいなこのすばらしい環境があるのだったらこれを残そうじゃないですか、という方に協力しよう。これが道徳になったり、あるいは自分の存在意義、レゾナートルになったりする。そういうNPOがいっぱいできています。こういう世の中になってきましたから、むしろ砂丘に一步足を踏み入れたら砂丘の憲法を守りましょうと、新しいそういう法律をつくってやろうじゃないかと、これが条例の考え方だったのです。今ではだんだんと定着をしてきました。去年の4月に砂丘にはレンジャー部隊ができて、鳥取砂丘レンジャーというレンジャーを県職員で設置したのです。そのレンジャーを設置する時、だいたい何人にしようかっていう話がありまして、職員の方がだいたいこんなメンバーでやろうと思います。5人だったのですけれども、5人が良いと、これで5レンジャーになると、5レンジャーでやり始めたところなのですけれども。

ともかく、こういう環境というのは、これからもキーワードになっていくと思います。鳥取県はそういう意味でモデルになり得ると思っています。現に先日、皆さんも驚かれたかもしれませんが、JT、タバコの工場が閉鎖されると、そういうことになったのですが、なんとその跡地に今度は電気自動車の工場を鳥取で作ろうじゃないかと、こういう話が降って湧いてきたわけでありまして。実は、正確には降って湧いたわけではなくて、私もそうでありましてけれども、だいたい皆でいろいろな働きかけをしたり運動を展開してやっとここまでこぎ着けたというのが真相ではありますが、なぜ鳥取に進出することに決めたのですかと、藤原さんという社長さんに記者会見で記者の皆さんがすごく問いかけていました。藤原さんはなんて答えたかという、「鳥取は環境対策に熱心だからです」こういうふうにおっしゃいました。こういうふうに変化が起きているのです。環境について一生懸命やることは何の価値もないことだったのですけれども、これが価値観としてクローズアップされてきているのは間違いないです。実は日本が高度成長まっしぐらなころ、日本は勝ち組になりました。その時、負け組というふうに言われていたのが、ヨーロッパとかアメリカです。そのヨーロッパで当時育まれてきたのは何かというと、例えばNPOという存在。営利活動を行うのじゃなくて、金儲けをするのじゃなくて、社会貢献をするっていう、そういう活動を自分達のヨーロッパ文化として育ててきたのです。それからあと例えば、男女共同参画だとかそうした新しい価値観、豊かな暮らしをやっていきましょうとかですね、それから福祉国家を作っている。更にもうひとつ、その高度成長期、日本が物質文明を謳歌している時にヨーロッパ社会が育ててきたのは、環境っていう概念だったわけです。だから皆さんもいろいろと頭に思い浮かぶと思いますけれども、緑の党という党が古くからヨーロッパでは生まれたりしました。環境のための党ってどういうことかなって、当時日本人はよく分からなかったと思いますけど、たぶん今だったら分かると思います。ああ、それはそうだなと、そういう価値観ってあるよなと、投票してみようって気になるよなっていうことだと思っております。あるいはいろんなリサイクル運動だとか、資源エネルギーを活用するとか、今でこそ日本で盛んになりましたけれども、太陽光発電を売電ということで電気を売る、通常の料金、買う料金よりちょっと高めにセットしましょうと。そういうやり方をドイツだとかが始めたわけですね。それで爆発的に資源エネルギーの開発が進んで

いった。それと同じことが今、やっぱり我々日本にも起きなきゃいけない。なにせ、今の総理大臣鳩山さんは25%CO<sub>2</sub>をカットしようと言っているのですから。鳥取県はそういう意味ではいろんなチャンスが出てくると思うのです。今、全国に先駆けて鳥取が始めたことで、J-VERというものがあります。これは何かといいますと、J-VERというのは緑だとかいろんな環境推進活動ありますよね、これでCO<sub>2</sub>の吸収をするわけです。このCO<sub>2</sub>を吸収するのを売ってやろうということです、企業さんとかに。その認証をしましょうということがありまして、公が認証しまして公的認証されて、これは確かにCO<sub>2</sub>を何トン吸収しますのでその分は企業さんのものになりますよ、とこうやって売るわけですね。鳥取県の日野町というところ、西部の山の方に日野町というのがあります。この日野町の板井原というところの森が我々の鳥取県で最初にJ-VERに登録をした森になりました。これをもっと増やそうとしています。例えば智頭町とかですね、いろんなところに今増やそうとしておりまして、こういうようなことが今評価されるようになってきたと。ようやくですね、鳥取にひよっとすると風が吹くだろうと、そう思っていたら電気自動車の誘致に成功したというのが現況のところでありまして。まだまだいろいろなことが起きてもおかしくないということですね。

ただ、その時代の変わり目で残念なのは、人口がどんどん減っていることです。おそらく間違いないと思いますけれど、もう59万を切ってくるでしょう。鳥取県は60万の人口県と言われていましたけれども、徐々にこれが減ってきております。実はこれ鳥取県だけじゃありません。全国ほとんどの都道府県で人口減が起きています。深刻なのはですね、自然減はまあ、ありでしょうがない。これはもちろん何とかしなきゃいけないわけでありまして、少子化対策といいますか、子育て支援をやろうと。鳥取は子育て王国をつくらうということを今標榜していますけれども、深刻なのは社会減ですね。転入と転出の差し引きをします。そうすると出て行った人の数の方が多い、社会減という現象です。これが鳥取に限らず全国ほとんどの都道府県で起きています。起きていない、逆に人を吸収しているのはどこかという、僅かです。東京都とか神奈川県とか滋賀県とかですね。本当にごく一握りのところしか社会増はないです。社会増と社会減はオールジャパンでトータル、プラスマイナス0ですから、そう考えると1局集中が起きているのですね。かつて昭和40年代だとかそういう時に過疎化とか過密化というものが問題になりました。それと同じ現象が今、日本全国で起きているのです。これは何とかしなきゃいけないのですけどね。ただ、どんどん疲弊してくるのは事実でありまして、中山間地域といわれるような山あいの方に行きますと、もう村の中には60才以下の人は1人もいませんよというところがざらに出ています。皆さんも歩いて頂けるとおわかりになると思います。確実に人間は歳をとりますので、今、平均年齢が70才の集落があれば、10年後には80才、90才。そうするとその集落でどうやってですね、安全安心を保っていくことができるのか。いざという時にですね、防災体制をどうやってつくっていったらいいか、買い物なんかはどうしたらいいのでしょうか、こういうことになってくるわけです。諦めるしかないよというのは、1つのこういう仕組みの考え方かもしれません。しかし行政ってそうは言っていられないですよ。では公共として何か考えられることはないでしょうか。そこで今、鳥取県が考え始めているのは、コミュニティビジネスのことで。今、西部の方を中心として、ちょうどこういうお昼の時間帯になってきますと、1台の大きなトラックが走り回るようになりました。昔、子どもの頃とか、行商とかだいぶん多かった時代もあります。私ら子どもの頃はそうですけどね、魚を売りに来たりだとかは当たり前のようにありました。今、それがなくなって皆スーパーだとかそうしたところに買い物に行くようになったのですね。それはそれでいいのですけれども、じゃあお年寄りになって車も運転しないということになったら、どうやって買い物したらいいのかなということでもあります。もう1度ビジネススタイルを変えようじゃないかと。売り歩く行商というのをコミュニティビジネスで復活させようというのを今、鳥取県はやっています。それで現実に売り歩いておられる、そういうお店も出てきています。また、もう1度、例えば



Aコープは無くなってしまったので自分達の集落でやってみよう、みんなで少しずつ協力して店を再現しようと、そういう取り組みも支援したりするようになりました。こういうように、少子高齢化だとか人口流出に対して、これも大きな時代のトレンドとして我々の地域を襲っているわけでありませぬ。

政権交代がありました。皆さんが入庁されているいろいろ混乱があるのが見えるかもしれません。例えば、去年の今ごろと今日やっていることは、多分違うことが少なからずあります。去年は自民党、公明党の政権だったのですね、国全体が。しかし今年は民主党、社民党、国民新党の政権になっているわけです。結構いろんなことがひっくり返ってしまっていて、行政の現場というのはなかなか辛い思いをしているというのは本当のところですよ。お金が入ってくるかどうかという心配があったり、また政策が変わったものですから、去年まで国がやっていたことがなくなってしまうこともあります。では混乱しているだけでいいのかというと、これはすみません、せつかく来られたのですけれど、文部科学省がやめましたのでやめますわ、というだけで本当に相手の住民の人は説得されるでしょうか。そんなことないですよ。我々は現場で頑張っているわけでありませぬから、住民の皆さんとか地域の皆さんが必要としていることをやっつけていかなければいけません。その辺を、国政は若干今、はき違えていると思うのです。政権をとりさえすればいい、議席を増やしさえすればいい。これは与党とか野党ではありません。私はもっと肝心なことを忘れかけているのではないかなという不安感を持ちませぬ。我々は現場で頑張っていますから、なおさらそう思うのだと思うのです。住民の皆様が求めているものを、こういう政権交代の荒波にありますけど、だからこそ我々はしっかりしなければいけません。本当にやらなければならないことをやっつけていこう、ということだと思っています。

実は先日、今、県庁の中の部局の方に指示をお願いしてございまして、再検討してくれということをおっしゃっているのですけれども、文部科学省の方で、川端大臣のところでも決められたことがありますけど、高校の授業料無料化だとか、私立学校の就学支援金を出していこうと、こういうことになったのです。それはそれで良いことだと思ひます。いろいろと原資の問題がありますから、原資の問題は国全体できちんと税金のことも考えて議論してもらわなければいけません。その責任を逃げるべきでないと思ひますけれども、ただこれ自体は悪いことでは必ずしもない。その高校の無料化、私学は9,900円とか16,000円とか、そういうことが出るようになるのですけれども、それはそれで良いことでもあります。鳥取県は元々、私学助成を一生懸命やっておりますので、所得の低い世帯、例えば250万円とか、そういう世帯はこれで完全無料化になります、私学は。ただ、鳥取県は他にもいろいろと私学助成をしております、全国で一番お金を出しているのです、私立高校に。だからそういうことになるのですけれども、同じことが私立中学になると途端に無くなっているのです。国の政策、それはおかしいじゃないかと思うのです。実は中学と高校は繋がっておりますので、中学の間は何もそういう保障はないのに高校に入った途端に保障がある、これはちょっと入っている者としては解せませぬよね。現場感覚に合わないということです。こういうものは我々のところで正していかなければいけません。国はおかしいですよ、川端さん間違っていますよと言う勇気を我々は持たなければいけませんし、現に言っていこうとは思ひますが、まずは当面、自分のところで手当てを考えざるを得ないのかなということであれば、我々で考えましようということになるわけですよ。鳥取県は小さな組織でありますから、そういうことを機敏にやっつけていく、小まわりを利かせてやっつけていくのが、我々の長じたるところだと思ひます。これでは決して東京都に負けないと思ひます。そういう意味で、そういう行政をやっつけていかなければいけません。いずれにせよ時代が大きく変貌を遂げる中で、その断層の中で我々はしっかりと舵を切っていかなければいけません、ということをお頭に置いておいて頂ければありがたいと思ひます。

地域主権国家を目指そうと、これは1丁目1番地の政策だと今の政府は言っています。私はそれを信じたいと思ひます。なかなかぎくしゃくするでしょう。時間もかかるかもしれません。

ただ、それを是非やるべきだと思っています。地域主権改革は、何を指すかということです。そもそも地方分権という言葉は、どこから生まれたのでしょうか。この地方分権は、そんなに昔の言葉ではないのですね。英語で言うと、decentralization となるわけでありませけれども、権限を分散させるということです。平たく言えば、国の権限を県に分け与えましょうと。こういうことでありませけれども、何のためなのでしょうね。これは住民のためなのです。地域のためなのです。決してそこで働く公務員のためではないのです。自分たちが権限が欲しいからというように世間の目に映るときもあるのですけれども、そういうものではない。沿革を申し上げますと、この地方分権ができたのは、国全体が行政改革を一生懸命やっていたころです。臨調と言われたようです、行財政改革をやった時期がありました。その時期にどんどんダウンサイジングして、小さな政府を目指そうということをやったのですね。小さな政府を目指してしまうと、当然ながら行政サービスは低下します。と思いますよね。ただそれは、必ずしも真ならずなのです。なぜかと言うと、小さなお金であっても、本当に住民の皆さんが望んでいること、地域にとって本当に必要なことを選んで上から順番にしていけば、トータルで出てくるプラスの効果は今までよりも逆に上回るかもしれない。そうですね、理屈としてはそうなるわけです。それをやるために、地方で住民が参画する地方政府をきちんとつくろうと。そこで大抵のことは解決できるようにし、そこに自由に使えるお金を任せて、国の方をガッとダウンサイジングして、地方の方もこじんまりとしているけれども機能的で住民の皆さんが参画して決められる体制をつくろうと。これが本当の地方分権なのです。そうであれば、生活を豊かにするための地方分権になるわけです。前に熊本県の知事をやった細川護熙さんという人がいまして、後に総理になった方ですけど、この方が知事をやっている時に、暮らしの部会というものをつくったのですね。その臨調の中の暮らしを豊かにする部会の中で出した結論が、地方分権で解決しよう、ということだったのです。これから、一挙に地方分権という言葉がはやりまして、分権、分権というふうに言い始めたのですね。今、地域主権という言葉を使ってなおその理念を明確にしようとしているわけでありませ。

片方で我々がきちんと考えなければならぬのは、地域でどんどん市民社会が成熟してきていることです。NPOの数を見てもよく分かります。それから、いわば「新たな公共」という言葉を最近用いるようになってきていますけれども、そういう存在の動きが非常にクローズアップされています。例えば国境なき医師団のような、そういう存在だとかですね。それから地域を見てもそうです。若い人達とかお年寄りの人達もそうでありませけれども、いろいろなことをやっています。例えば、今、東京の方に持って出たり、大阪に打って出たりしているのです、食のみやこだと我々は考えています。そういうことで、商品開発をしたり、持って行く主力のところに、結構、農家の女性達がいたりするのですね。ケチャップを作りましょうと、トマトケチャップ。これは東京のアンテナショップで結構売れるのです。この間、大阪のスーパーのニッショーストアーというのがありまして、阪急ニッショーさん、ご存知の方もいるかもしれませぬ。阪急ニッショーさんの中に、我々の鳥取県の中部の野菜だとかを持っていくのです。もちろん野菜なんかも売れるのですけれども、意外に引き合いがあるのはお味噌だそうでありまして、これも地元の人達が手作りでやるわけです。なぜ売れるかと言うと、今、無添加とか、自然そのものというのが売れるのですね。工場で作ったから売れるとか、大きな工場で大きな企業で作ったから信用できるということではなくなってきていますね。そういうようにビジネスチャンスが広がってきているのですけれども、その担い手が結構そういう住民の皆さんであったりするのです。市民社会がどんどん成熟してきています、そういう人達とパートナーとしてやっていく、対等の関係を組んでやっていく、これを急いでやっていかないといけない。まだまだ、役所はこれが下手だと思ふのですね。地方分権、地域主権をやっていくためには、これこそひとつのキーワードになるべきものでありませ。そうやって国の形を変えていこう、国の出先機関とか、ほとんど全部廃止しても大丈夫と思います。皆さんも仕事を始められると

分かると思いますけれども、あまり絶対に必要な役所ってそんなにないです。特に地方の出先機関は、むしろ県でやらせてもらった方がよほど早くできるし良い仕事ができるのにとみんな腹の中では思っているのですね。それは分かると思います。ですから、これは多かれ少なかれ進むでしょう。国の出先機関を廃止して行って県の方に移していく。県の方から市町村の方に更に福祉とかいろいろな仕事を移していく。県と市町村との役割分担もしっかりやっていく。場合によっては、県と市町村のハイブリット行政をやってもいいと思っています。今、日野郡の方では、山の中のことでありますけれども、例えば、道路の雪かきとかを一緒にやろうじゃありませんかと、パスポートの交付なんかは市町村の方でやりませんか、こうやって県と市町村との垣根を壊しはじめています。鳥取県だからできる取組みかもしれませんが、こんなこともアイデアとして出てくるのではないかと。そうやって住民の皆さんから見て使い勝手がいい、参加し甲斐のある行政サービス、スタイルを鳥取からつくっていく必要があると、それこそが地域主権ではないかと思えます。

県民や地域のための県政を進めるために、やはり私達の方もマインドを変えていかなければならないと言われてます。皆さんは入ったばかりですので、是非、新しいマインドをすぐに身に付けてほしいと思います。県庁や県警やあるいは教育委員会や共済組合、それぞれの組織の中で、これはおかしいのではないかと思えば、皆さんは素直な声を上げてもらった方が私はよっぽど良いと思います。それが圧殺されるようでは、実際に民主的な組織運営はできないと思いますから、遠慮なくやってもらいたいと思います。おそらく皆それを期待しているのです。ただ、なかなかそこがやりにくいということかもしれません。その場合には例えば私にメールをくれてもいいですし、いろいろな制度がありますので、その辺は考えて頂ければと思います。頭でっかちで理論だけ先行させるとか、あるいは形式を重んじるとかいうことに役所仕事ってなりがちです。これは結構、県民から馬鹿にされているのですよね。「なんぼやっても時間がかかるばかりで、毎年同じことをやっとなら」とか、皆さんもそういうイメージを持っていると思います。それを打破していきましょう。実行する、実践をするというのは、むしろ我々の仕事としなければいけないのだと思います。その時に、民間の皆さんと結びついていく、住民目線で、そして連携していく、それを我々は実行すべきだと思っています。前例がこうだからということではなくて、未来はこうなるべきだということ、これを頭の中に描いてやっていくべきだと思うのです。先例思考になりがち、陥りがちなのです。皆さんも、職場に入るとまず渡されるのが、去年の書類の綴り、一昨年の書類の綴りがありまして、それを見て4月5日と書いてあったら、4月5日頃にこれを仕上げなければいけないのだよと教わるのです。これはこれでいいのですよ、1つのカレンダーを叩き込むという意味ではね。でも去年と同じような書類を作るために1年間過ごすというのは、あまりにも虚しくないですか。そうではなくて、その背景にあるものの方がよっぽど大切ですよね。1つの決裁をとるということであっても、その裏にこれで一体どういう住民の皆さんが救われるのか、これでどういうふう子ども達が健やかに育つのか、治安が保たれるのか。そういうことを想像して、そのためにはじゃあこういうふうに変えていった方がいいねと、周りの人を巻き込んで改革をしていくことがどんなにすばらしいかということだと思えるのです。これを是非、皆さん、未来志向で考えてほしいなと思います。

2枚目の方、2ページの方でありますけれども、組織に生きるということで若干、官僚組織のことを書いたりしておりますけれども、官僚組織というのはビューロクラシーという言葉からくるのですね。ビューロというのは部屋ということです。その部屋を支配する、そういう行政、組織、これがビューロクラシーという組織でありまして、マックス・ウェーバーが考えたことですね。これはある意味で正しいシステムではあるのです。まず1つはこういうピラミッドをつくりまして、命令の連鎖というのをつくりまして、chain of command と言いますが、上の者の命令を下の者は聞くのだという、こういう連鎖を作る。そうすると良いのは、こういうふう

やりましょうと言うと、パーっと全組織に1発で瞬時にして話が伝わり、みんなで動き出す。だから動きは良くなる。そういう意味では正しいことなのかもしれません。また分業と共同でございまして、責任分担と役割分担をするわけですね。分業共同体制を微細に組むわけですね。ですからハイアラーキーの一番末端の部分、現場の部分にいきますと、そこには例えば福祉の領域の、例えば障がい者の領域のこういうような事業の専門家というのができるわけですね。道路をつくる、特にこの地域のこの事業にはものすごく詳しい、という人ができるわけです。これは分業体制があるからこそできるということですね。そういうパッケージを作ったという意味では、官僚組織というのはよくできた組織だと思います。ただ、いくつもの弱さとか時代に合わないことがあって、組織の変更を迫られるということなのです。1つは、これだけが世の中ではないということですね。実は我々の組織は何のためにあるかと言うと、この外にある住民の皆さん、この環境の中に置かれて初めて役に立たなければいけない。だから外に対して対応していくコミュニケーション能力、外の言っていることを受容していく受け入れる能力、それから外の要求に応じて自ら構想していく企画する能力とか、そういうものを我々は作っていかなければいけないのです。だから、外との接点というのは実は大事なのだ、というのがこの官僚制の盲点だと思います。また、これはハイアラーキーでありますので、なかなか上に情報が伝わりにくくなったりすることがあります。すぐ隣の部屋に物事を伝えようとしても、一遍トップまで行って戻ってこないと話が伝わらないという、これはもうナンセンスですよ。こういうようなところで、物事を考え直す必要があるだろうという反省もあるのです。また、これは、できるだけ形式化しようということ。効率の良い仕事をするために、自分を押し殺して仕事をするようなマニュアルをつくるのです。役所はこれ、今でも好きです。何かと言うとマニュアル、マニュアルと言いまして、式典一つするにもシナリオを書きたがるのです。ナンセンスで馬鹿馬鹿しいからやめてくれと思うのですけれども。まあある程度は必要なのでしょうが、細かいところまで一字一句まで全部マニュアル化されていたりする。ここに立っているというマニュアルがありますね、ずっと立っている人がいます。役所に入ると気が付くと思うのですが、滑稽に思われると思うのです。おかしいと思ったら変えてもらいたいと思うのですが、本当にそういうことが起こるのです。こういうことでないようにするために、俺は人間なのだ、I'm here、私はここにいます、こういう存在なのです、その個性だとか能力を大切にしている組織でないといけないですよ。この辺を意識的に私達は変えていかなければいけないと思いますし、鳥取県みたいな小さな組織では、それは決して難しくはない。皆さん1人1人がやる気になれば、変えることは可能だと思っています。私もそういう思いで今、やっているわけです。

コミュニケーションのとり方も、上手にやらなければいけない。今、パソコンと向きあっているだけの人間が、別に役所に限らず会社でもそうでありまして、すごく増えています。コミュニケーションが下手になってしまっていてね、隣の人に話をするのにわざわざメールを出したりして、愛を語るのならばしょうがないのかもしれませんが、そうでないのならやめてもらいたい。話せばいいのですよ。話すことはすばらしいです。それを聞いている人がいるのです。こういうことを考えては駄目だよ、こうした方がよいよって、アドバイスが全然意外なところから出てきたりする。だから声に出してコミュニケーションをするってとっても大切なことです。また、インフォーマルなコミュニケーションもね、飲みに行くっていうのはウザいなあって、あのおっさん達いい加減にしてほしいな、という思いがあっても、行ったらそれなりにおもしろいことがあったりして、人間性というのは表だけでは見えないのです。私も社会に入って初めてそれが分かりました。一生懸命仕事しましたが、意外と評価はついてこなかったです。それでインフォーマルな付き合いの方もですね、それなりにやって自分をさらけ出すと、それで初めてついてくることもある。変な話ですけど、弱みを見せるというのが大切なテクニックなのですよ。ある程度弱みを見せると。これは自分も会社に入ってから、県庁という

組織の中に入って学んだことでありますが、カミソリを振り回していても人は寄ってこないよというふうに当時の上司から言われました。理論を振りかざしてね、バッサバッサとやるだけではいけない、そういうのは懐にしまっておくものだというふうに言われました。その意味はよく分かるのです。やはりコミュニケーションだとか、人間関係というのはとても大事です。これは皆さん、素質は絶対に持っているはずでありますので、こうやって面接試験などもありましたので、是非磨いて頂きたいと思います。

決定のリスクと書いていますけれども、これはグループ・シンドロームと言われる現象なのですが、集団で考えると間違いを起こすことは往々にしてあるのです。三人寄れば文殊の知恵と言います。これはある意味、正しいところはあります。話し合いは必要です。だけど最後は、絶対にこれは良いのだ、というのをみんなで納得してやることですよね。ただ集団の輪を大切にすることを優先してしまうと、話がとんでもない方向に行ってしまうことはよくあります。去年やったことは変えない方がいいよねとか、そういうのはあまり理由になっていないのです、理由になってないですよ。ちょっと考えれば分かることですけれど、それが理由になったりするのは。集団思考シンドロームの欠点としてよく言われるのは、ベトナム戦争を止められなかったことだと言います。ホワイトハウスにいた人達が、お互いの輪を強調するがあまり、やっても得にならない戦争を止められなかったと。それはよく例で言われるのです。こういうようなことが往々にして集団の中では起きる、ということは注意をした方がいいかなと思っています。

新しい挑戦、チャレンジを我々はやっていかなければいけないということだと思っております。そのために、是非皆さん、発想を変えて頂きたいと思っております。固定観念というのは、幸いにして皆さんはあまりまだ持っていないですね。社会に一番近い存在です、今県庁の中で言えば。警察本部の中で、教育委員会の中で言えば、一番近い存在です。ですから皆さんは感性というものをよく職種の中でも活かして頂きたいと思っております。そのために採用しているということがあります。それから今まで当たり前だと思っていたことが変わるものというのは意外にあるのです。もっと固定観念を無くして正直な目で見てみるということだと思っております。皆さんのお手元の資料、1枚変なものが付いています。これ何でしょうか。どこから引っ張ってきたか分かりますよね。これは気象庁のサイトですね。よく見慣れたものです。これ何だろうと思われると思います。平成22年4月4日23時発表、昨日の11時でありまして、私がこのレジュメを作っていた時間帯なのですけれども。一番上、見慣れていますよね、天気図。下の方は何だか分かりますか。そうですね、下2枚これは気象レーダーのサイトです。皆さんも見慣れているかもしれません。一番上が一番見慣れているでしょう、テレビの画面などでも。我々は日本というところを思い浮かべますね。鳥取というところやって境界線が引いてあってこの辺にあるという思いですよ。まわりは全部海です。そうですね、知らず知らずと頭の中に入っているのです。何で東京が栄えているのでしょうか、鳥取よりも。何ででしょう。これは分からない。あまり必然はないのですよね。だけどそれをもっと分かりにくくしているのがこの頭なのです。次のレーダーサイトをご覧頂きたいと思っております。下の写真のようになっているレーダーです。これもよく見慣れているものだと思いますが、気象レーダーの映像です、と出てくるやつです。薄曇りの絵が入っておりますけれども、鳥取地方もよく晴れているということですね。夜中の11時の図であります。これで見ると一番上と違います。何が違いますか、一番上と真ん中は。簡単なことですが、何でも良いです。そうですね、もうちょっと視野が広がっていますね。我々頭の中に、日本というところ一番上をまず思い浮かべるのです。小学校の時からこれで習っていますから。だけど実は県境って無いのですよね。上空から見ると県境はない。しかも広大な海が、太平洋だとか日本海だとか。韓国とかロシアとか中国とか、そうした対岸が見えてくる。これで見るとずいぶん情報が変わってきます。東京はアメリカには確かに近いかもしれない。しかしそこには、べらぼうな海を超えていかなければいけないわけですよ。しかし鳥取県と

というのは、別に県境もなく見てみれば、本当にアジアに近いのだというのが、これで見やすくなると思います。これからの戦略を考える時に、こういう頭って必要ですよ。更に一番下、先ほどおっしゃったようにひっくり返してあるのです。ちょっと見にくかったかもしれませんが、イメージが合わなかったかもしれませんが、ひっくり返してみると、ああ一緒だなと気が付くと思います。ひっくり返してみますと、日本海は琵琶湖のような形をしています。それもそのはずでありまして、昔は琵琶湖だったのです。これは 2,500 万年前からの地球の歴史を辿ってみれば、元々アジア大陸の縁辺部だった日本列島の地域、この境目のところにまず湖ができるのです。それが更に造山運動、火山運動が盛んになって、どんどん切れ目が入って分かれてくる。特に真ん中のところを押し出すものですから、日本列島って弓なりに曲がってしまったのです。だからこんな形をしていまして、琵琶湖のような形をしているのですけれども、元々琵琶湖のような内陸湖だったのです。繋がっていたのですよね、近いはず。この日本列島のところ、更に上の方を見ていくと台湾のところには沖縄がありますけれども、もう沖縄なんかこれで見ると本当に中国ですよ。だから琉球王朝が成立して交易があり独立していたというのは当たり前のことだったのです。ところが今、日本列島の地図の中で一番上にあるように、沖縄なんか日本海のところまで持って来てしまっ、入りきらないものですから、見えにくくなっているのですけど、実相はこういうことなのですよ。こうやってひっくり返してみると、私達日本が今何を考えていくかという、今経済の中心は上海です。上海というのは一番下で言うと、右の方の中国大陸のところの真ん中辺にあるわけでありまして。それからソウルだとかそういうものがある。こうしたところが経済の中心になりはじめています。東京はほとんどない辺境地なのです。こういう頭で考えれば、東アジアの中で生きていかなければいけない。これからの世界を考えれば、鳥取にもまだまだチャンスはあるというのが見えてくると思うのです。ここから戦略を組んでいく。私も実はここから始めたのです。それで環日本海航路というものを頑張って実現してみようとか、いろんなことを考え始めるわけです。世の中をひっくり返すためには、そういう発想の転換が時として必要なのではないかなと思うのです。これはいろいろな世界であります。是非皆さん、現場で考えてください。それで見えてきたものを行政の施策に反映していく、それでむしろ施策をつくり替えていく。国のやり方がおかしいのであれば、国がおかしいよと我々から声を上げていく。こういうことが鳥取型のやるべきことではないかなと思うのです。

改革は、古い改革はもう終わりました。情報公開とか、そういう改革のステージはもう脱皮しつつあります。むしろ、住民の皆さんとのパートナーシップを十分に築いて、地域と一緒にあって世の中を変えていく、実際に活力をこの地域から生み出していく、安心して暮らせる、そういう社会システムを作っていく。そちらの方に、改革のエネルギーを向けていくべきだと思います。それが「次世代改革」と呼んでいるところであります。

守りと攻めの二正面でやっていかなければいけないと思います。今非常に皆さんが就職で苦勞したのと同じように皆が苦勞しています。ですから、守るべきところは守らなければならないのですけれども、守っているだけではジリ貧なのです。今社会システムが変わろうとしているのです。イノベーションを起こそうという言葉をご存じだと思います。イノベーションには 2 つあると言われておりまして、デマンド・プルとテクノロジー・プッシュとがありまして、技術革新で押し出していくようなイノベーションと、需要が引き上げるようにして変えていくイノベーションがあると言われていています。今、環境の世界では、デマンド・プルが起ころうとしていると思うのです。電気自動車だとか太陽光発電だとか、そういうのをやるべきだということから技術開発が始まり社会システムが変わろうとしている。こういうところを我々地域から生み出していかなければいけないのだと思います。そういう意味で、攻めること、打って出ること、鳥取県はちょっと下手だったと思います。今、本当に大交流時代が始まってしまいました。大阪圏の人達に、もっとこうやって便利になって、すぐにでも遊びに来られますよと

いうことを知ってもらわなければいけない。それでも城崎に行くのですね。城崎に行くよりもよっぽど早いです、カニを食べるなら、鳥取に来た方が。だけどそれが分かっていないので、そういう意味で攻めていかなければいけない。美味しいものがいっぱいあります、食のみやこ鳥取県です。それを利用して、新しい商品開発をするとか、世界中の市場へ繰り出していく。こんなことも当然ながらできると思います。子どもの教育を育てていく意味でも、学校の中で縮こまってやっているだけでは駄目です。地域の皆さん、保護者の皆さんとかいろいろな方の参画を得て、そうやって教育を盛り上げていって、一番大切な子どもの育ちを作っていくことだと思います。これを私達が現場から築いていく必要があるのではないかと思うのです。そういう意味で、守りと攻めとの二正面作戦だと言っているわけであります。

「我が為すことは」というふうここに書かせていただき、タイトルにさせて頂きましたのは、今、龍馬伝というのが流行っていますよね。その坂本龍馬でありますけれども、非常に荒波の中ですけれども、ちょうど皆さんと同じような若い身空であります。残念ながら散った人生であったわけでありまして、残したのものとても大きかったわけですね。「世の中は我を何とぞ言わば言え、我が為すことは我のみぞ知る」、これは龍馬の詩なのです。世の中は私がやっていることを何とでも言うなら言えばいい、私が為すべきことは私自身が知っているのだという、そういうメッセージですよ。

冒頭に申し上げました井泉水の弟子であった尾崎放哉は、41歳でこの世を他界しました。最後に詠んだのが「春の山の後ろから煙が出だした」という句でありましたけど、短い生涯でありました。野辺に送られる煙かもしれません。それが見えたのか、あるいは天に上る自分の気持ちだったのか、さみしさだったのか、人の想像を掻き立てるものではあるかと思えます。しかし、人生は有限であるということとその煙の中に尾崎放哉は見たような気がするのです。県庁の人生、せいぜい60歳の定年位までの話であります。長いようでありまして。皆さんは今、入庁したばかりでそう思っているかもしれません。しかし、限られた時間の中で自分を是非、燃やし尽くすぐらい、自分をかけて頂きたいと思えます。かつて明治維新の頃、若き志士達が活躍したように皆さんにも奮闘して頂くことを切に祈りまして、私からのメッセージとさせて頂きたいと思えます。どうもありがとうございました。

(所長) どうもありがとうございました。もう少し時間がございます。知事と直接お話できるチャンスというのはそうそうあるものではないので、皆さんから何か質問、先ほど頂きました講演の感想でも聞かせて頂ければと思います。質問のある人、挙手を。はい。

(中本) 中部総合事務所県土整備局の中本淳と申します。平井知事、今日はありがたいお言葉、ありがとうございました。知事の方から、様々な鳥取の取組みと申しますか、新しい取組みを聞かせて頂いたのですが、私は県庁に入庁させて頂く以前は、違う地方の場所で学業を学んでおりました、今までは鳥取ってどこにあるのかとか、何があるのだ、全部砂丘じゃないのかと言われたりしたこともありまして、そういうふうには、まだまだ鳥取というものが国内の人にも知られていないところがあるのかなと思っております、知事からも世界とのネットワーク、インターネットサイトとか、そういったご意見もあったのですけれども、もっと個人としては鳥取の良さというものを、私も初めて知った内容もあったもので、アピールしていけるのではないかなと思っております。知事の方から、このネットワークといった面において、具体的な方策を何か考えておられるのか、またはこういうふうに進めていきたいという構想など、何かございましたらお聞かせ願いたいなと思えます。

(知事) 私は、発信力が足りないということでありまして、このたび「統轄監」という部局を作ったのです。全庁のいろいろな広報を戦略を持ってやっています。今チャンスなのです。なぜかと言いますと、毎朝8時からドラマをやっています。「ゲゲゲの女房」というドラマが始まりました。水木しげる先生の奥様が主人公なのです。「人生終わり良ければ全て良し」と最後にこういうふうにはやくのが境港なのです。原作がそうになっていますから、間違いなく

いずれ境港にやってくるだろうと思っているのですが、あのドラマで毎朝のようにこの鳥取県を発信してくれる、今は安来でありますけれども、山陰を発信してくれています。そういうチャンスがある。更に、大交流時代を踏まえて、高速道路を通じて入ってくる人たちが確かに増えています。昨日も結構、車が出ていました。賀露の辺りのレストランとか和食屋さんなんかは並ぶのだそうですね、順番待ちが出るくらい。変わってきています。更に海外からのお客さん呼び込む、こういうことも必要になります。戦略的にPR展開を図っていく必要があるのかなと思っています。例えば、韓国の観光客を呼び込むのに有効なものは何だろうかといういろいろ試してみましたけれども、意外にテレビショッピングなのですね。日本と若干文化が違っていて、テレビショッピングで観光商品を販売しています。こういう人達がリピーターになって、高級温泉ということで鳥取の羽合温泉とか皆生温泉なんかに来るようになっていきます。そういうように国のそれぞれの特徴を考えたりして、世界中に向けたPRをやっていく必要があると思っています。最近、ロシアの沿海地方でも鳥取県の人気は急速に上がってきました。その背景としては、実はメディアを呼んでいるのです、メディアツアー。テレビ局だとか新聞社なんかをこちらに呼んで取材してもらおう。その時にいろいろと我々もお世話をさせて頂いて、もっと大きな効果が得られるようになっていきます。中本さんがおっしゃったインターネットも大切だと思うのです。先般も若手の人と話をしたのですが、ブログだとかそういうものを展開してみてもどうか、ということをやっています、今、実は県庁でもトリピーのブログが2つありまして、1つは観光のトリピーで、もう1つは環境のトリピーでして、両方のトリピーがさえずっているわけでありまして。ツイッターでは、米子市が今、そういうものを持っていて、1,700人位のフォロワーがいるそうでありまして、これも一職員がやっているそうでありまして。全然観光とも何とも関係ないです。皆さんも個人で、我々も応援しますので、こうやって情報発信すると広がりが出ますよ、と試してもらえればいいと思います。つい先日も島根県の職員と鳥取県の職員で、初めてですけれども、共同して一冊の本を作りました。「おかげ」という本です。山の陰と書いて山陰なのですが、我々のメンタリティーとして「ようこそ、ようこそ、鳥取県」という、そういう妙好人の話も、因幡の源左の話もございまして、そういう思いで「おかげ」というタイトルをつけまして、非常に潇洒なおしゃれな本を作りました。東京でも売り始めたところでありましてけれども、様々なやり方でもっともっと売っていくべきだと私も思っております。

(所長) ありがとうございます。